



怪異譚 2



鳴海はるか

夜はそれ以上は何事も無く、無事に朝を迎えることができた。

昨晚の化け物に締め付けられた跡が残っていて宮森君のご両親から心配されたが、昔からたまに湿疹ができるのでとごまかしておいた。

今日は学校を休もうかどうかためらったが、家に来たくらいだからどこにいても同じだと思い学校へ行くことにした。

玄関へ向かうと、そこへちょうど宮守君が帰ってきた。

とっさに首についた痣を隠そうとするが、宮守君に手を握られその動作をさえぎられてしまう。

「よく見せるんだ。」

宮守君はその痣をしばらく見た後に、おもむろに私の部屋へ案内するように行った。

しばらくあちこちと見た後に私に尋ねる。

「昨日はお守りを学校へ持っていかなかったのか？」

私はしかられた子供のようにうなだれた。

「お守りを持っていくのを忘れたからこの場所を探し当てられたのだな。幽かに気が残っている。あと早九字護身法でを使ってしたのは間違いないな？」

「・・・うん。」

「とりあえず九字護身法で張った結界はもう必要ないと思うからといておく。」

そこまで分かるものなんだ、と感心していると、

「俺・縛・日・羅・納・舎・競」

と言って、指を弾いた。

私がこの間の事件の時にはこんなことした覚えが無いことを言うと、

「前回のときにも自分がその後やっておいたんだ。」

と言われた。正直全然気づいていなかった。やっぱり宮守君は凄い。

「本当はあのときに教えるべきだったんだが、時間を気にしてできなかった。すまない。結界は張った後はかならず解かなければならない。」

そこでいったん宮守君は息を整え、学校に行くのに着替えてくるから玄関で待っていてくれと言われた。

彼が戻ってくるのはとても早かった。私は宮森君が慌てた姿を初めて見たかもしれない。

「たぶん時間に余裕は無い。急ごう。」

私たちは走り出した。

「式町、お守りの中のお神札はどうなっている？」

お守りの口をあけてみると、お神札は真っ黒になっていた。

「この新しいのと入れ替えておくんだ。」

学校へ着いたが、宮守君は自分の教室へ行かず、3年生の教室の方へと走っていった。

そして一部屋ずつ確認していった。

「以前に式町に絡んでいた三人を見つけたら教えてほしい。」

程なく三人のうちの二人が見つかった。

二人はものすごく驚いていたが、宮守君はかまわず二人に問いかけた。

「突然ですまないが教えてほしい。先日はもう一人いたと思うのだが、今日はどうしている？」
二人は表情を曇らせながら、

「今日はたぶん休みだと思う。昨日までスゴク顔色悪かったもん。」

と言って顔を見合わせていた。そこで予鈴がなって先生が現れた。

先生の声にもかまわず宮守君は二人の手を強引に引いて走り出す。

「彼女の家まで案内してくれ。自分の予想が間違っていなければ、今彼女は大変なことになっているはずだ。」

彼女の家のところまで来ると、目の前に救急車が止まっていた。

走っていくと担架に載せられた彼女が現れた。

その顔色はもう土気色を通り越してどす黒く変色していた。それに私にも感じられるほどの邪悪な気を感じた。

「遅かった。もうすでに地獄へと引き込まれている。」

救急車は彼女を乗せるとサイレンを鳴らしながら走り去っていった。

その音も次第に遠くなり聞こえなくなった。

彼女の友達二人は抱き合っただただ泣くばかりだった。

宮守君が言うには、彼女が私に何らかの呪詛を掛けていたらしい。しかもそれは相手を呪い殺すほどのものを。

幸いにも私はそれを退けるだけの力を持っていたからたすかったが、彼女は呪いの代償に自分の命を持っていかれたと言うわけだ。

「人を呪わば穴二つ、と言うだろう。呪いを掛けるということはそういったことなんだ。」

宮守君と私は泣き止まない二人をただ見守るしかできなかった。

そして翌日、彼女が亡くなったと聞かされた・・・。

音楽準備室の怪（自分で勝手に命名）以来、私、式町美鶴もちょっと自分に自信を持つことができるようになったおかげか、友達ができるようになった。

まあ、相変わらず宮守君との関係は当然のように聞かれるんだけど、特に何も無いっていうことで通している。実際何も無いことに変わりはないし・・・。

正直私自身宮守君に惹かれていることは惹かれているとは思うんだけど、当の宮守君本人がいつも無口、冗談も言わない、笑うべきところを真剣に受け取る、というほどの朴念仁なので彼への私の気持ちが恋愛かどうかすら推し量れないような状況なのだった。

教室で友達とそんなことを話している最中でも当の本人は次の授業の準備をしているか、神社の仕事に関係するらしき本を読んでいたりすることがほとんどで、それを田村君が邪魔するくらいだ。

そんなある日、友達が放課後に遊びに行こうと誘ってくれた。

私はこうやって友達に誘われたことも無かったので、本当に嬉しかった。

けれど次の瞬間宮守君の許可が下りないかもしれないと思い尋ねたら、

「楽しんでくるといい。」

とあっさりOKを出してくれた。友達に、

「なんか宮守君って美鶴の保護者みたいだよー。」

って言われてしまった。私は

「居候させてもらってるからね。」

って答えたけど、内心そんな風に見えるんだなあと微妙な思いだった。

初めてゲームセンターにも行ったし、ショッピングに行っただけで友達が選んでくれたワンピースを買ったりしてとても楽しかった。

楽しい時間を満喫したし、時間も遅くなってきたので友達と

「また明日ね。」

と言って別れた。そこで友達とは違って家が別方向だった私は後ろから視線を感じた。

友達が見ているのかなー、くらいに思って振り返ってみたが、もうすでに友達は遠くにいるしこちらを見てもいない。

そして今はこちらを見ている視線も無かった。

いろいろあったから疲れているのかもね、と帰るために向きを戻して歩き始めた。

やっぱり、誰かが見てる・・・！

振り返ってみてもやはり何も見えず、私は怖くなって宮守君からもらったお札を握り締めながら走り出した。

しばらくして視線は感じなくなったけど、それでも一目散に走って帰った。

家へ着く頃には私はもうへとへとだった。

「お帰りなさい。あら、どうしたの？そんなに汗をいっぱいかいて。風邪を引いたりしたら大変

だからお風呂に入ってらっしゃい。」

宮守君のお母さんに言われるままお風呂の方へ向かおうとしたところで、宮守君が神社の仕事が終わったのか家へ入ってきた。

「おかえりなさい。」

「ただいま。」

彼はそれしかいわなかったけど、一瞬だけ表情が変わった。そんな気がした。

それ以降、時折その視線を感じるようになった。

常にその視線を感じるというわけじゃなくて、それは放課に友達と廊下で話しているときだったり、体育の授業中だったり・・・。

やっぱりそんな時、どうしても気になって周りを見回してしまう。

「美鶴どうかした？」

友達が心配そうに声を掛けてくれる。

「ううん、ちょっと気分がすぐれなくて・・・。でも大丈夫だから。」

こんな時でも友達がそばにいてくれるだけでかなり心強かった。それにいざとなったら宮守君もいる。

以前の私なら一人で震えることしかできなかったはずだ。

そう思うと不安な感情も少し和らぐのだった。

数日たっても例の視線は時折感じることはあったけれど、特に別段何の被害も無く宮守君も私に何か言ってくることはなかった。

ひょっとしたらやっぱり疲れているのか、気のせいなのかもしれないと思った。

そんなある日、宮守君は以前にいたお寺の方に用事があるとかで早朝から家を出てしまったために一人で学校へ行くことになった。

考えてみると宮守君の家にご厄介になりはじめてから、初めての一人での登校だ。

私は必要も無く緊張しながら登校した。

距離は近く学校へはすぐに着いたのだが、今日はいつもの視線をすでに感じていた。

しかも今日は心なしかいつもより強く感じる気がする。

「美鶴おはよー！」

「おはよう。」

友達の挨拶に応じていると、いつの間にか視線も感じられなくなっていた。

やっぱり気のせいかな？

友達と談笑しながら教室へと向かった。

「あれ、今日は旦那は休みか？」

と田村君が冷やかしてきた。慌てて私が否定しようとしたところで、

「旦那じゃなくて、許婚よ。」

なんて友達までもそれに乗っかってきた。私はもう反論する気もなくなって黙るだけだった。

それは別としても、やっぱり宮森君がいないだけで私の心は不安に満ちていた。

その日は移動教室や体育も無かったので私は教室から出ないようにしていた。

そのせいなのか例の視線を感じたのも朝だけだった。

いつの間にか私はすっかり忘れて放課後まで普通に過ごすことができていた。

放課後になって校門まで友達と一緒に歩き、それぞれ別の方向に家があるため別れた。

その直後だった。

あの視線を感じた。しかも朝感じたようにやはり以前より強いものだった。

私は怖くなってお守りを持って走って帰ろうと思ってポケットを探る。

ない！ひょっとしたら自分の部屋に置きっぱなしになっているのかもしれない。

とにかくそれでも私は走った。走ることにできなかった。

走っている間、視線は絶えず私を追ってきているようだった。

無我夢中で家までたどり着いて玄関の扉を開ける。

ちょうど目の前に宮守君のお母さんがいて、私の様子を見て驚いた顔をした。

そこでふっと視線も消えたような気がした。私は緊張の糸を解くと

「ちょっと運動に走って考えてきたんです。」

と言った。その時だった。

私の耳元で確かに聞こえたのだ。

「見つけた。」

もう、その日はそれから生きた心地がしなかった。

肝心の宮守君は、早くても明日の朝までは帰ってこないらしい。

お守りは思ったとおり自分の机の上に置きっぱなしになっていたの、とにかくそれをずっと握り締めていた。

ご飯ものを通らないような状態だったので宮森君のご両親はとても心配してくださったけど、迷惑を掛けたくなかったので走りすぎて疲れているのかもしれないと言っておいた。

今はとりあえず視線も感じないし、変な声が聞こえてくることも無い。

でもとても安心できなかった。

自分の部屋へ行くと電気を点け、お守りを握りしめて布団にもぐりこんだ。

そうすることで多少は恐怖を紛らわせると思ったからだ。実際にはそれくらいで紛れることは無かったが、それでもこうして震えていることしかその時の私には思い浮かばなかった。

絶対に今日は眠れない、とっていたが、過度の緊張で疲れていたために程なくして眠りの淵に落ちていった。

どすっ。

足元のすぐ近くに何か落ちてきたような物音に、はっと目を覚ました。

いけない、私眠っていた？あれ、電気点けていたはずなのに点いてない？

そこで私は起き上がろうとした。が、まったく動かない。

えっ、ひょっとして金縛り？嫌な予感がする。

するといきなり足元の方から

ずるずるずるっ。

と何か引きずるような音がした。私はもうパニックに陥って叫び声をあげたかったが、それすらできない。

だがそこで物音がしなくなった。完全な無音。

自分の心臓の鼓動と呼吸の音だけが、やたらはっきりと聞こえてくる。音がしたほうを見ようとしたが、首も曲がらないこの状況ではそれもできない。まるで深淵の闇の中に自分だけがいるような感じだった。

しばらくしても何も無かったのでひょっとしてもうこれ以上何もないかと胸をなでおろした。

がっ！

と足首をつかまれる。何か考える間もなく、それは胸元まで凄い速さで来るとぴたっと止まった。

そして布団の隙間の暗闇から、くわっと大きな眼が見開かれ、私をじっと見ていた。

全身に鳥肌が立つのがわかった。

逃げ出したかった。けれど逃げ出すことはおろか、叫ぶことさえできない。

「ソレ」から手が伸びてきて、私の首を締め付けてくる。

私は苦しさで恐ろしさで半狂乱状態だった。

その時視界の片隅にお守りがおちているのが目に入った。手のすぐそば。

何とかがんばれば届くかもしれない。そちらへ意識を集中させると何とかお守りをつかむことができた。

「お願い、私を守って！」

「ソレ」は音も無くさっと退いた。

体が動く・・・！それに気づいた私は冷静さを取り戻すことができた。

こういうときには以前宮守君が教えてくれた早九字護身法が役に立つかもしれない！

刀印を結び印を切りながら唱える。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前」

わずかに残っていた「ソレ」が、さっと消えていく。

緊張の糸が切れて、私はぺたんとその場に座り込んだ。

ふと見れば、もう空も白みかけていた。